

〈昭和59・60年の展望〉

文字・表記(史的研究)

坂口 至

はじめに

昭和59・60年に公表された文字・表記関係の史的研究を展望するにあたり、編集委員会からの要望は「大きく見ての傾向」(重点主義)ということであったが、不勉強の筆者の力では到底叶え難いので、時代的、内容的に多様なこの分野の研究を整理紹介し、気付いた点を若干述べて見ることで責めを塞ぐことをお許し戴きたいと思う。

記述は、まず単行本と雑誌論文(単行本所収のものを含む)に分け、文字・表記の内容によって、漢字(万葉仮名を含む)・仮名・補助符号の順に見て行くことにする。文字と表記は本来分けるべきであろうが、ここでは漢字などの内容の中で前半部は主に文字、後半部は表記という形を取りたい。なお、外国資料を扱ったものは最後にまとめて触れることにする。音韻や文法と関連したものの、資料紹介の中で文字・表記に触れたものもいくつか取り上げる。

この時期に公開された単行本で、まず触れるべきは、①池上楨造

『漢語研究の構想』(岩波書店、昭59・7)と②③亀井孝『日本語のすがたとところ』(一)(二)(吉川弘文館、昭59・12、昭60・10)であろう。①は、戦後以来の旧稿をまとめられたものであるが、著者のあとがきにもあるように、書名の「漢語」を「漢字」と読みかえてよいほどこの分野の論文を多く含んでいる。いずれも後の研究者の指針となった論考であるが、特に「識字層の問題」(自筆本と誤字などを含む)は文献を扱う者が忘れ勝ちな文字の担い手の問題に迫ったもので、示唆されるところ大である。②③の(一)は、日本語のすがた(音韻)を鋭く追究した周知の論文を多く含むが、文献批判の実際における書かれたかたち(文字・表記)の鮮やかな処理、評価には何度読んでも興奮を覚える。(二)には「古事記はよめるか」ほか上代文献の訓詁に関する論文を多く収めるが、唱へられてなほ日の浅い、いはゆる文字論に対する、亀井孝流の高度の寄与(山田俊雄氏の序文)がちりばめられている。

その他、この分野の旧稿(一部新稿を含む)をまとめた著書・論文集、あるいは文献の総合的研究の中にこの分野の記述を含む著書に、

④山口角鷹『日本漢字史論考』（松雲堂書店、昭60・7）、⑤水島義治『萬葉集東歌の国語学的研究』（笠間書院、昭59・5）、⑥江湖山恒明『國語攷』（笠間書院、昭60・9）、⑦石塚晴通『圖書寮日本書紀研究編』（汲古書院、昭59・2）、⑧宇都宮睦男『白氏文集訓点の研究』（漢水社、昭59・3）、⑨小久保崇明『天鏡の語法』（明治書院、昭60・10）、⑩田百合子『長恨歌・琵琶行抄諸本の国語学的研究 研究索引篇』（桜楓社、昭59・2）、⑪北原保雄・小林賢次『続狂言記の研究』（勉誠社、昭60・2）などがあつた。また、逐次刊行された『春日政治著作集』（勉誠社）にこの時期⑫『5万葉片々』（昭59・10）と⑬『6古訓点の研究』（昭59・2）があつた。⑭小松寿雄『江戸時代の国語 江戸語』（東京堂出版、昭60・9）には当期の仮名遣いの様相を中心とした記述がある。なお、⑮榊島忠夫他『事典 日本の文字』（大修館書店、昭60・4）は有益な一冊であるが、史的な記述は少ない。

二

雑誌論文に移る。まず、漢字の字体・字形に関する研究は当期も多くない。1 蔵中進『平安時代古辞書所引則天文字考——「新撰字鏡」類聚名義抄の場合——』（神戸外大論叢）35—2、昭59・9）、2 同『空海『益田池碑銘』の則天文字』（水門）14、昭60・1）、3 北川和秀『続日本紀に見える「三」「氏」の書き分けをめぐる』（五味智英先生追悼上代文学論叢）所収、昭59・3）、4 浅井潤子『近世地方文書用字考』（史料館研究紀要）16、昭59・9）。1、2は一連の則天文字研究のうちの一つで、その特殊な由来は意識されず単なる異体字として扱われている事実を明らかにしたものの。3は異体字の視点から、書写者の相違を考えたもの。4は文書に見られる様々の意字（異体字）を

考察し類型化を試みたもの。国語資料としての文書類の研究は緒に続いたばかりなので、今後の発展が期待される。なお、5杉本つとむ『異体字はなぜうまれるか』（日本語学）3—3、昭59・3）もある。漢字とそれに対応する和訓の研究は依然活発であるが、方法的に注目すべきものがいくつかあつた。まず、6峰岸明『上代における漢字の定訓について』（横浜国大國語研究）2、昭59・3）、7 同『上代漢字定訓考証——「万葉集」を資料として——』（横浜国大人文紀要語学・文学）31、昭59・10）、8 同『平安時代における漢字の定訓について』（国語と国文学）61—10、昭59・10）は、かつて『訓読の語の場合』その漢字の和訓決定の手続きは、単に古字書・古点本に推定する和訓の存在を確認するに止まらず、該当し得る諸和訓のうち、唯一確定的なそれを求めて行われるべきものと思われる（『昭和53・54年度国語学界の展望——文字・表記（史的研究）——』、『国語学』121）と述べられたことの具体的実践として注目される。氏は、上代・中古の文献に使用された漢字について、まず『古事記』の上表文から定訓の存在を推定し、『万葉集』や『新撰万葉集』などの借訓表記、また正字表記と真仮名表記による同語異表記をもとに定訓とすべき語形を抽出する。氏自身が認めておられるようにこの手続きで得られる定訓は数が限られてくるほか、例えば「下」の場合「シモ」を定訓とせざるを得ない（「シタ」が抽出されない）という限界もあるが、貴重な試みには違いない。一方、9 山口佳紀『古事記の用字と訓読』（国文学）29—11、昭59・9）、10 同『古事記の文体と訓読』（論集上代文学）14、昭60・6）は、前出の亀井孝氏『古事記はよめるか』の『古事記』は完全なかたちではヨメないという立場を支持し、それまでの『古事記』訓読の成果、特に小林芳規氏の思想大系におけ

る方法を批判的に吟味した上で、「古事記」の訓読は、基本的には平安初期の訓点資料の訓みによりながら、文体的・位相的側面を十分に配慮すべきことを説く。柔軟な思考で説得力が強い。

その他、個々の漢字あるいは一連の漢字の訓みについての論文は、上代文献を中心に今期も数多く見られる。11赤羽学「古代文献に見える『折』の訓み方」(岡大国文論稿)13、昭60・3)、12大久保弦「ウガラかヤカラか—古事記福羽素戔の段の「族」字訓をめぐる—」(名古屋大学国語国文学)57、昭60・12)、13山崎福之「万葉集の『仿徨』と『徘徊』について」(親和国文)19、昭59・12)、14同「万葉集と訓読—『乍』の場合—」(親和国文)20、昭60・12)、15稲岡耕二「万葉集訓読存疑(二)」(論集上代文学)13、昭59・3)、16冲森卓也「万葉集訓読考—一人麻呂歌集歌四首—」(国文白百合)15、昭59・3)、17片山武「譬喩歌二首」①二八二八、二八二九の訓釈について」(美夫君志)29、昭59・6)、18同「万葉集を読む—新しい訓読注釈をめざして—」(金城国文)61、昭60・3)、19毛利正守「万葉集巻一の八番『今者許藝乞菜』の訓読をめぐる」(万葉)120、昭59・12)、20同「萬葉・二七五六番の『借有命』の訓みについて」(万葉)121、昭60・3)、21大島信生「君不座者心神毛奈思」(万葉)121、昭60・3)、22同「萬葉集巻第八、一五六〇番歌「始見之崎」について」(皇学館論叢)18—5、昭60・10)、23添田建治郎「万葉集「明晚」「明闇」訓読考」(山口国文)8、昭60・3)、24鶴久「萬葉集訓読試案—「借有命」について—」(香椎潟)31、昭60・9)、25小泉道「日本靈異記の本文と訓読私案—下巻を中心に—」(愛媛大学法文学部論集文学科編)17、昭59・11)、26樽田良照「漢字専用文献としての前田家本三宝絵詞研究試論」(文献探究)16、昭60・9)、27石川洋子「近世における「論語」の訓読法についての一

考察—再読文字を中心として—」(訓点語と訓点資料)73、昭60・4)、28同「近世「也」字の付訓について—漢文の語末助辞「也」字と指定の助動詞「ナリ」を中心として—」(実践国文学)28、昭60・10)、29上野力「明治初期の漢字の読み方をめぐって」(常葉学園短期大学紀要)16、昭60・6)など。19は、最新の字余り研究の成果を利用して「コギテナ」の訓みを補強したもの。25は、緻密な考証による着実な研究。27、28は、比較的研究の手薄なところだけに今後の進展が期待される。

点本類の訓読に関する研究も引き続いて盛んである。30小川芳規「石山寺藏佛説太子須陀拏經平安中期點の訓讀語について」(訓点語と訓点資料)71・72、昭59・5)、31同「正倉院聖語藏華嚴經探玄記古点と大乘院阿毗達磨雜集論古点について」(正倉院年報)7、昭60・3)、32小林芳規・松本光隆「防府天満宮藏妙法蓮華經八卷の訓点」(広島大学内海文化研究所紀要)12、昭59・9)、33勝山幸人「金光明最勝王經の古訓法について」(野州国文学)33、昭59・3)、34宇都宮睦男「古訓の消長」(解釈)30—12、昭59・12)、35同「宮内庁書陵部藏朝鮮活字本白氏文集巻第四所載「イ」本注記本文と訓点」(国語国文)53—7、昭59・7)、36同「大東急記念文庫藏白氏文集第四の訓点について」(国語国文)54—4、昭60・4)、37石塚晴通「岩崎本古文尚書・毛詩の古点」(東洋文庫書報)15、昭59・3)、38築島裕「正倉院聖語藏大智度論古点及び央掘魔羅經古点について」(正倉院年報)7、昭60・3)、39西崎亨「天理図書館藏仁平四年写「三教指歸」の訓点」(武庫川国文)26、昭60・11)などがあり、それぞれに綿密な考証がなされている。

その他、古辞書の類の和訓の研究に、40原卓志「色葉字類抄における和訓の増補とその表記形態」(国文学放)102、昭59・6)、41山本

秀人「改編本類聚名義抄における文選訓の増補について」(『国文学研究』106、昭60・3)、42菊田紀郎「米沢図書館蔵和玉扇の和訓」(『国語学研究』25、昭60・12)があった。40、41は、標題の如く辞書の発達過程での和訓の増補を扱ったもの、42はハ行転呼音を中心とした表記上の不統一を論じたものである。

漢字の用字・用法の研究では、43藤井茂利「上代文献に見える『以』について——推古遺文と古代朝鮮の表現法との比較」(『国語国文薩摩路』28、昭59・5)、44同「風土記に見える文末の助辞『之』について——日本漢文の表記法をめぐって」(『国語国文薩摩路』29、昭60・10)、45田中雅和「草案集」における『方』字について(『鎌倉時代語研究』8、昭60・5)などの個々の漢字の用法に関する論文、46瀬間正之「古事記表記論I——音仮名表記の考察」(『上智大学国文学論集』18、昭60・1)、47築島裕「萬葉集歌謡における返読字について」(『五味智英先生追悼上代文学論叢』所収、昭59・3)、48板垣徹「万葉集における反転表記放——人麻呂歌集を中心に」(『文学史研究』25、昭59・12)、49沖森卓也「古語拾遺の用字」(『白百合女子大学研究紀要』20、昭59・12)、50佐藤栄作「倭名類聚抄」における万葉仮名の考察(『和名抄の新研究』所収、昭59・1)、51山田俊雄「近世常用の漢字——冠附かぎし華の用字」(『成城国文学論集』16、昭59・6)、52同「近世常用の漢字(三)——冠附かぎし華の用字について」(『成城国文学論集』17、昭60・8)、53西讓二「雑俳における漢字使用状況——青木照の場合——」(『成城文芸』112、昭60・10)などの文献ごとの漢字の用法の多種多様な研究があった。47は、返読漢字の種類とその現れ方の諸相を調査し、古代の漢文訓読との関係を考えてもので、堅実な論。48は、それと同じ問題を部分的ながら詳しく考察したものの。51、52、53はそれぞれの文献の漢字の基

礎的な調査である。また、単語の表記形態を扱ったものに、54田島優「幕末・開花期におけるトケイの漢字表記——新説八十日間世界一周の翻訳態度——」(『名古屋大学国語国文学』56、昭60・7)、55上野力「外人(Forignter)の示し方の変遷について」(『常葉国文』10、昭60・6)があった。その他、漢字の比較表記論とでもいうべきものに、前出の43、44のほか、56李鐘徹藤井茂利訳「郷歌の訓読字と万葉集歌の正訓字の運用法比較」(『国語国文薩摩路』28、昭59・5)、57星川清孝「萬葉集の漢字表記と唐詩」(『国学院雑誌』86—11、昭60・11)、58渡瀬昌忠「漢語の和訓と和訓書きの歌——人麻呂歌集略体歌の表記——」(『国学院雑誌』86—11、昭60・11)があった。

さらに文献の漢字表記の実態からその文献の性格を論じたものに、59中村昭「万葉集卷十九表記の位相」(『美夫君志』29、昭59・6)、60北島徹「万葉集卷一後半部の編纂——藤原宮歌群の形成——」(『古典と民俗』16、昭60・12)、61品田悦一「万葉集東歌の原表記」(『国語と国文学』62—1、昭60・1)、62藤井俊博「続日本紀宣命の表記と漢文訓読」(『訓点語と訓点資料』75、昭60・10)、63池田証寿「新撰字鏡玄応引用部分の字順について」(『北海道大学国語国文研究』71、昭59・2)、64上野和昭「御巫本日本書紀私記」の成立に関する一考察(『国語学研究と資料』8、昭59・12)、65早川厚一「四部合戦状本平家物語真字表記論考」(『国語と国文学』61—9、昭59・9)などがある。61は、東歌の東国方言的要素の少なさの原因を、防人歌との名詞や用言の訛語形の現れ方の比較を通して、「筆録」の事情の相違に求めようとした意欲的な論。62は、付属語表記・返読表記・用字法などから当資料への漢文訓読語の影響を論じる。64は、万葉仮名を中心とした表記の有り様から、当資料の重層的成立を説く。

また、音韻や文法に絡めた漢字の用法・表記の研究に、66佐佐木隆「被覆形」(露出形)に由来する借訓字」(『東洋大学日本語研究』1、昭60・5)、67同「和名類聚抄」にみえる地名訓表記——《音便》を中心として——(『東洋』21—8・9、昭59・9)、68築島裕「万葉集の動詞の語尾表記について」(『万葉集研究』12、昭59・4)、69夏井邦男「万葉集における副詞の表記について——その仮名書きを中心として——」

(『語学文学』23、昭60・3)、70同「万葉集における副詞の表記について——その正訓字を中心として——」(『北海道教育大学紀要人文』36—1、昭60・9)、71馬場治「統紀宣命における自立語の同語異表記」(『皇学館論叢』18—1、昭60・2)などがある。66は、「手」「木」などの被覆形と露出形をもつ漢字が借訓字としてどのように使われているかを調べ、露出形に由来するものは借訓仮名として定着しているのに対し、被覆形に由来するものは正訓字としての用法から自由になり切れていないことを述べたユニークな論。68は、万葉集の漢字の正訓と仮名との交用表記の実態を動詞の活用表記について調査し、ほぼ活用の種類によって正訓専用表記と交用表記に分かれることなどを明らかにしたものである。

ほかに古文獻・古辞書の類の注記・注文を考察したものに、72辻憲男「古事記」音読注の諸形式」(『親和国文』19、昭59・12)、73同「古事記」音読注の「重複」「矛盾」をめぐる」(『親和国文』20、昭60・12)、74近藤尚子「倭名類聚抄」の註文の考察」(『和名抄の新研究』所収、昭59・1)、75菊田紀郎「古辞書に認められる注記について」(『山形県立米沢女子短期大学紀要』19、昭59・12)がある。

最後になったが、上代の国語表記の発達についてやや巨視的に論じた76瀬間正之「国語表記の開発——前古事記史——」(『上智大学国文学

論集』17、昭59・1)、77門前正彦「仮名交じり文」(『福井大学国語国文学』24、昭59・9)のほか、最新の成果を織り込んだ概説として読みごたえのある78毛利正守「文字による文学」(『日本文学新史』古代1)所収、昭60・10)があつたことを記しておきたいと思う。

三

次に仮名の研究を概観する。仮名の字体・字形についての研究は、前節の30、31、32、33、38、39などの点本類の研究でそれぞれになされて有益であるほかは、特に目立った研究はなかった。79吉見孝夫「文字史からみた現行仮名字体制定の背景——片仮名の場合——」(『北海道教育大学紀要人文』35—1、昭59・9)は、国語問題に関わるが、「マ」「ネ」などの字体の定着を近世以降の資料をもとに論じている。

仮名の用法については、80平林文雄「箆物語」(甲本)仮名字母索引と漢字・仮名字母の使用について」(『群馬県立女子大学国文学研究』5、昭60・3)、81田島清司「送り仮名表記の諸相——梅沢本古本説話集と打聞集——」(『九州大谷研究紀要』10、昭59・3)、82榎木久薫「明恵上人夢記の表記様式における年代の変移について——仮名表記の自立語による考察——」(『鎌倉時代語研究』7、昭59・5)、83太田絃子「あひゞき」の使用文字と記号」(『就実語文』5、昭59・12)84同「あひゞき」の使用文字・統」(『就実語文』6、昭60・12)などがある。81のような送り仮名の史的的研究は存外に少ない。たとえ大体的見当はついていてもやはり文献ごとの調査の積み重ねが必要であろう。ほかに、仮名の特殊な字体の用法を扱った85野口義廣「浄瑠璃丸本における表記をめぐる——ひらかなの合字について——」(『山口女子大國文』6、昭59・11)

があった。

また、仮名を中心とした文字生活史の様相の一端を垣間見せてくれるものに、短文ではあるが、86池上禎造「中標示の名所名から」〔文学〕52—3、昭59・3〕があり、上杉本「洛中洛外図」の地名表記の訛形についての興味深い指摘がなされている。

仮名遣いの研究では、まず雑誌「日本語学」(3—5、昭59・5)が「現代かなづかい」を特集したが、中に87こまつひでお「定家仮名遣の軌跡」、88武部良明「歴史的かなづかいとは」、89沼本克明「字音仮名遣いとは——その成立と問題点——」などの史的分野に関わる論文が収められている。中でもこまつ、沼本論文は、概論の域に止まらず示唆するところの多いものである。

定家仮名遣いの時代的、資料的な広がりについての研究には、90江口正弘「十六夜日記諸本の仮名遣——室町期以後の定家仮名遣の一断面——」〔国語と国文学〕61—4、昭59・4)、91今野真二「連歌書のかなづかい——『假名文字遣』との比較を通して——」〔国語学〕139、昭59・12)、92同「大山祇神社法楽連歌のかなづかい」〔国文学研究〕86、昭60・6〕などがあった。93西崎亨「京大転写本俱舎論音義のオ・ヲの仮名遣について」〔武庫川国文〕24、昭59・11〕は、定家以前におけるオ・ヲの仮名のアクセントによる使い分けの資料を新たに発掘したもので注目される。94古瀬順一「日蓮遺文の表記にみられる「お」と「を」の混同について」〔国語国文学報〕41、昭59・3〕は、定家仮名遣いの及ばない世界での一実態を報告したものの。近世の仮名遣いでは95坂梨隆三「接尾語「ずくめ」の仮名遣い」〔岡大國文論稿〕12、昭59・3〕がある。存疑の仮名遣いを浄瑠璃資料の徴証で確定させたもので、この種のものでこのような地道な調査が必要なものはおお多いので

はないかと思われる。また、バ行・マ行の音交替と仮名遣いに関連した論文が、この時期に集中したのも一つの特色であろう。96遠藤邦基「バ行・マ行の『よみくせ』——発音から仮名づかいの問題へ——」〔同志社国文学〕24、昭59・3)、97酒井憲二「中近世における一種の仮名遣いについて(上)(中)」〔日本大学語文〕60、61、62、昭59・6、60・2、60・3)、98坂梨隆三「『ふ』を『ム』とよむこと——付、『は・ひ・へ・ほ』の場合——」〔東京大学教養学部人文科学科紀要 国文学・漢文学〕22、昭60・3)、99同「『ふ』を『ム』とよむこと——浄瑠璃本の場合——」〔国語と国文学〕62—5、昭60・5)。96は聞書類に見られる「表記はb系、よみはm系指定」について論じたもので、この場合通例と違い当代的なよみを「よみくせ」としているという。97は謡本・甲陽軍鑑・仮名遣書・キリシタン国字本など多数の資料を駆使してこの問題に迫っているが、特に甲陽軍鑑などに見られる写本と版本の仮名遣いの相違が興味深い。98、99は近松の浄瑠璃本を詳査し、原則的に「ふ」とあるところは「ム」と読むべきことを確認したものであるが、語によって違いがあり一律に扱えないこと、一部位相による使い分けが見られることなど、新しい知見を示す。今後、伝統的な仮名遣いに囚われない写本の類(いわゆる「藁」の文献)の調査が必要かと思われる。

四

補助符号に関するものでは、音韻と関連したものが多いが、100沖森卓也「琴歌譜の音の高低に関する符号について」〔国文白百合〕16、昭60・3)、101西崎亨「武庫川女子大学図書館蔵嘉元三年写「和漢朗詠集」小考——濁音符「 \circ 」と「 \circ 」との交用資料としての性格・その他——」〔武

庫川国文』25、昭60・3）、102 添田建二郎「謡曲譜本の上胡麻について」〔語文研究』59、昭60・6）など。100は琴歌譜に見られる「上」「下」などの符号が平安初期以前のアクセントを反映している可能性を説く。例外の解釈、それらの符号が一律に付されていない理由など検討の余地はあるかも知れない。101は当該の符号の交用表記から資料の転写過程を考えたもの。102は上胡麻の用法を多角的に分析した詳細な論。その他に、103天沼寧「くりかえし符号」〔大妻女子大学文学部紀要』16、昭59・3）も用法の史的過程に触れるところがある。また、前述の52には、ツの仮名に半濁音符を付すことで促音を表すという珍しい表記の紹介がある。

最後に、外国資料の文字・表記に関する研究を概観する。104森田武「キリシタン資料におけるハ行音のローマ字表記」〔安田女子大学国語国文論集』13、昭59・6）は、主に感動詞の語頭に用いられるH表記について、既に出ている無音説をキリシタン資料の内部徴証と当時のポルトガル語の実際の両面から駁したもので、定論となろう。105丸山徹「ロドリゲス日本文典におけるポルトガル語正書法」〔Aの表記について』〔南山国文論集』8、昭59・3）、106同「通事件天連ジョアン・ロドリゲスのポルトガル語正書法」〔Bの表記について』〔南山国文論集』9、昭60・3）は、それぞれの表記についてロドリゲス自身の正書法と版本とのずれを指摘したもの。その他、日葡辞書編纂の際の引用文の表記における各部担当者による規範の違いを論じた107菅原範夫「日葡辞書の引用文におけるローマ字綴りの改変について」〔高知大國文』15、昭59・12）、本文と巻末字集に集録されている語およびその表記の関係を考察した108豊島正之「ぎやどべかどる」の巻末字集に就て」〔国語と国文学』61-1、昭59・1）もある。

また、109福島邦道「ドチリナ・キリシタン」翻字二題——付・原典の問題——〔実践国文学』27、昭60・3）、110同「キリシタン漢語二題——付・天聲版「イッ」瑣言——」〔実践国文学』28、昭60・10）は、キリシタン資料ローマ字本の翻字のあり方、国字本に見える漢語の表記のユレについて論じたものである。補助符号の研究では、111出雲朝子「天草版平家物語における句読点の用法」〔青山学院女子短期大学紀要』39、昭60・11）がある。当文献に見られるピリオド・コロンの用法を整理し、基本的にラテン語などのヨーロッパの句読法に拠っていること、巻によって用法の違いが見られることなどを明らかにする。特にコロンの用法に教えられるところが多い。

おわりに

以上、拙い展望を終わる。当然触れるべき重要な論文の見落とすもさることながら、取り上げたものの紹介も繁簡よろしからず、筆者の興味に偏した記述、論旨を誤解したものも少なくないのではないかと恐れる。ひとえに御寛恕を願う。最後にこの分野の今期の特徴と今後の方向という意味で、次の二点を記して置きたいと思う。

一、漢字の訓読の研究に、新しいうねり（峰岸氏・山口氏の論）を感じたこと。亀井氏の論文集の刊行、春日（政）博士の著書の復刊も時宜を得たと言うべく、今後の方法的深化が期待される。

二、キリシタン資料の扱いについて、他の音韻などの分野でもそうであるが、ポルトガル原語などの表記との対照的検討が今後一層必要になっていくであろうという感を強くする。